異人恐怖傳 後

全

三十二

ル 3
1560
3 ㊥

伊門 號 15-60 巻 3

刻異人恐怖傳論

武藏國忍　黑澤翁滿　述

一人ハ上智中智下愚あり理ハ大理小理あり道ハ大道小道あり我神の道ハ大道ハ大理なるまゝを學ぶハ大智の人ハあらざるべし信ぜざる事多きあるべしさる神代の古事など記されしさまを今世ハ現ハ比較べて見る時ハいとも思ひ係ぬ事のみなるを以て中智下愚の人ハ大かた寓言虛誕なりとして疑ふほどハ未竟ハ言腐しあるべきもそれ然まど

不許賣買 二百部限

もろ〳〵霊〳〵く異〳〵しきハ原来天地の形狀なるまゝ唯上智の人ばかりぞ神代ばかりの傳説ハ真の大理なるこゝを深く遠く慮り信て今世ハ物事の光景も此神の道ゟ漏ぬこゝをバ覚るべし儒道ハ小理を説くこゝ判然なれど中智の人ハ信悦ぶ道なるを世ゟハ中智の人多くまゝバ打ばづゝ弘く行なるべしハ漢土の道なる所謂伏羲ふまれ堯舜ゟまれ其元ハ人の考へ定めゝる事なれ次第小世の態ゟ合せく然もなるべく人ハ信べきやゝ小説爲〳〵のなるまゝバ中智ハ人ハ一向ゟ

打憑〳〵て此道の外ゟハ道といふ物ハなきが如くゆゑ思ひ言ふ〳〵人然まゝ其ハ皆人智ゟ考へ出〳〵る道なまゝバ狡黠ぶ〳〵却ては世の理義小合ハぬ所もなるを以く上智の人ハ猶肯ぬ類も多く下愚ハ其道の煩累〳〵ふ困ゝて悪〳〵厭ひなくもなるべし佛道ハ空理を小さく説く故ゟ下愚の耳小入易くして下賤婦女子の類ゟ信仰する者多きなるべしなるも佛道ハ甚く異様なるものゆく並てハ虚偽を以く悪俗を嚇〳〵嗔〳〵て矯直さんと構へられど空理の中より種々の相を現

て来りて何事も此道より漏ぬさはふ説為つゝ天地萬物
の理を三世因果ふ盡しゝるゞ如くなりてゝも其根源ハ
悉く虚寓の方便より出ゝる故ふ上智中智の人ハ其虚
偽を憎み其拙陋を嘲りてをきゝ信容る人もあれを
唯下愚なんさる根源を知るべくもなゝ孫ゞ只管ふ其
説喩さる事を信実ゝ受て又あれ道と尊み崇まんはゝ
愚癡ふ凝固する類ぞ多ゝ中る我　大御國ハ神道ふ
て事足りて具ゝ備ゝ國柄なりゝを中頃儒佛の道渡り
来てより已来事の瑣細ふ委曲くなりゝく善き事あれふ

しもあゝまゝ亦國體を損じゝる事も少ゝ試ふ其
由をいゝぐ儒道ふく善き方の事ハ上古ハいゝゝに省約
てゝりゝを文飾の事出来てよりハ君の尊さも親の辱
さと今一際さる事と知き又其文字ゝて萬の事を書記
しふどさる事ハ便利なるあとなり然きとも何事も然
一箇づ理をいひ尽てゝ瑣細ふ穿鑿り究めんとするゝ
ふ自然ふ詐偽といふ事も發り又ゝゝ便利あるふ就てハ
奸謀を企る媒ともなりて却てハ唯一さぐふ誠実あり
て素朴なりゝ上古ふ及ばぬ事どもゝ多し佛道ふて善

き方を愚昧なる俗男女の暴人なども死て行くさ〻の事なども驚き懼まて聊心を改むるもあり又其作善追福の業などもく〻の心の和む事なるなどの類なるべし然まてゝ此ハ惣て悪らめるものゝ為ハ益あるべくして素より善人ハ用ゐゞ〻に道あるに他を誹謗し自を押立る所より頑愚の心を凝結して我慢徒黨の風を發し終ハ天下の災害となりし事ども多し然ハあまたゞも此三の道相行なまて世々を重ね来つるハ近き年頃より蘭學といふ事行れ始て西洋の國風を學ぶ事となりぬ其道ハ大理ハ懸てハいと〻疎き物なれど大智の人ハ笑ふ事も多々まさるべし小理のうへを究理して人ハ耳目を驚ら事多々まさるべし今世ハ人氣ハ合ふらゝ此學ハもく〻のれく一向ハ流行して蘭學をせざる者まゞ頻ハ眼前ハ小理ハ伏して日本の國風を忘てやうよはくなまるはいと〻歎ハき事ハ限といふべし約莫西洋諸國の風ハ〻ゞ眼前の物事をハ〻さはゞふ理を推究めりて中ハて竟ハ天地の大なる形状をも推測りて是ハく萬理を盡しゝうと思へる事なれど

其ハ〳〵人の智慧算術の届る限ることゝあまた真ふ
霊〳〵く異〳〵く妙なる理ハ知得べき際ふけ〳〵まバ此天
地の初發まゝかく天地の動く理人身の生まれ出る縁故
まゝ其生活く理なゝどハ猶奈何とも知るべきよゝなし
然まゝども其國人の智ハ極競ひ考へゝるかのなまバさ
すゝに用ゐる調度の機関まゝ物と物と交へく製る菓
なゝどハ意外ある事もけまバ中智下愚の人どもハ皆驚
き崇びて真ふ似ある道なりと思ふめゝさまゝで猶克考
ふまゝばその調度薬物ゝども大〳〵ハ無ても事闕ぬ物

なるふ徒ふ人の精力を費〳〵そゝぐ〳〵ハ驕奢の基と
ゝる事もけまバ上智ハ人ハ更ふ採用することなし惣
て邪智ふ長け柔弱ふ流るゝゝ皆是外國風ふ移まるも
のなゝゝ儒佛の輩ハ國恩を忘まて漢天竺の為ふ御
國ふ仇ゝるゝゝ者ゝ昔よりさゝゝふ有ゝる聞えぬ
を蘭学の徒ハやゝもすまバ西洋の為ふ國恩を忘まて
おふけなゝ事を為出國家より罪せゝまゝる類なゝ
ゝとけゝぬゝ人氣を釣ることゝ他道々よりも巧なり
といふゝ抑日本ハ武國ふゝく人おのゝゝ猛く雄

〳〵其強きこと萬國に勝まさる國風なる筑上にも以
るべく〳〵佐ぎく外國の弱き風よ押移り近比は殊に西
洋人の真似をして好事とのみ思ふやうに成まさるか
つてゞ居るも歎〳〵紀俗習といふべし近古までも日本
人の強き〳〵事は源平より已来世々に軍記戦争の書
を讀て知るべくまた此書の中にもケンプハゲ驚き
歎じて記〳〵る長崎の賈人濱田兄弟が事あるゞ少てを
考ふべし惣て外國の書どもを見るに日本人のごとく
敵に向ふ最初より神水を呑て死を究る人は北とも北

じ人は引とも引じ唯君の為家の為に千騎が一騎かな
るまでも太刀の双付續くんほどは斬死にさるべきと
風は絶て一箇も記〳〵るを見ば其中の魁ぶちなる者
を一人二人討るまバ残まるは蜘蛛の子を散らす如く
逃亡る状なるべし其根柢利慾の為より起りて忠魂義膽
の乏〳〵紀國柄に因るなるべしさまバ豊臣太閤の朝鮮
を攻伐ひ〳〵る時僅に肥後半國の主なりける加藤清
正朝臣の篭らまつる蔚山の城を明朝鮮の全國に力を
盡〳〵て攻〳〵るよ〳〵なるゆゑ陥〳〵得ずして徒に食攻め〳〵

餓疲せるゆゑ猶乗入る事をば得せで竟よハ援兵の
為ゆ斬崩さるゝて逃散るるなどいとゝ怯く拙き事いふ
ばかりなしさハ明朝鮮の弱兵どもなるゝバ西洋諸國の
兵とハ異なりあどもいふばかりなきまでかのをろを明より
憑まして西洋邊の兵をも傭ひ来ゆまゝ遠國の使者ゆゑも
来ゆ居ゝを駈催して大砲を打せなどゝゝる狀の彼處
よて記る書ゆ所見ゝるも共ゆ手痛き戦ハろきで逃
散ゝる景迹をもて頼むよ足ぬ事をば知ばし又同時唐
嶋の戦よハ加藤嘉明朝臣抜駈して僅よ五人乗ゝる小
舟ゆく敵三百人ばかり乗ゝる大船ゆ漕着飛入まゝふ
引ゝる弓をばふ放ち得ず皆おめゝゝ斬屠らまゝるゆゑ
いとばかり微弱き朝鮮人なりとも然ばかりの多勢ゆく
打負べき理よハあゝばれど勇武ハ勢の多少よハよゝらず
唯魂の利鈍ゆよる物なれバ思ひ切ゝる敢死の勢ゆ氣
を奪ゝまて敢なくかゝる負たゝバせゝゆゑ有ばゆ約莫か
くゝ如くなる事どもを今人の常ゆ思ひ言ふありさまハ
どもと比較べても見るばゝ國の為ゆ君の為ゆ御大事と
あゝんをゆにさる蛮人どもゆ打負て徒ゆ家の恥を残

大砲の音ふ聞懼して逃て帰らんと思ふ人やあるべき
惣て　御國ふ生る人ハ自然ふ強きこれを和魂といふ
今人ゝて也各此魂ハ持ながら外國の為ふ覆ハれて有
ども無ぐ如くなるハ口惜き限なゝぞや此和魂といふ
事も御國の古學ひらけてより人ゝ頻ふいふ事のやう
なれども古くよりもいひ事ゆゝ今昔物語ふ明法博
士助教清原善澄といふ人の盗人ふ殺さゝ事をいへる
段ふ　さゝハいみじかりけるまことにもやまとだましひな
りけるものゆゝ云云と見えたり撰まゝも恐惶き御事

なれども今の現ふ
御學則ふも和魂の事を專ゝをさせ給へる由是を兼り
又大江戸の　遠の朝廷ふ蘭學ハ御取用なゝといふ
こゝ今制させ給へる由是を兼て共ふ大ゝく尊く有
難く覚ゆるふ付けて也　上ゝ上ふハ如此有　大御意
御座さてゆの成下ゝ下ゝとて已ゝ意のまゝふ得も得知
ぬゝを喧囂ゝく轉ゝいふゝ慷慨さふ此書を世ふ弘
くゝてさる輩ふ目を醒さめんと思ふハ聊赤心報國
の微意ゝなり

今上皇帝禁中の御學問所ふる

慈鳳明治八年ヨリ二年六年ノ間ノ人氣思フベシ

一世よある事ハ何事も　國家の御制度はまくなるものなるべバ下ゞ下とゝてハ必かういふべき物ゝハいはゞ況て津々浦々の防人は事なるゝふ至ってハそもゝ國家よ御定はゝり且深き御思慮御座まゝて嚴ゝに備へさせ給ふ御事なれバ毫ゞゝと外より窺ひ知奉るべき事なゝねゞ弥下ゞ下とゝく左右論ひあゞすべき際ふハはゝゝゞ唯日本ハ強く外國ハ弱し殊更　君ゞ御稜威もて幾千萬の異國船寄せ来るとも事もれく討平らげさせ給ふんずゝむと　國家を憑りゝく思ひ委ね奉

アて已々ゞ産業ゝ心をいき世を安らゝに暮さべき事なゝ茂近き年比アメリカイギリスなゞの船どもは時々参来る事あゝに就て其身ゝも相應しゝゝゝ市人村客の輩ゝゞまでおのゞゝゞは産業も忘れて唯其事をいひといひ論ひゝ論ふ事ども第一　上ゝ憚らゞゞ日本の英氣を塞ぐゝ當アて聞棄ゞゝ事のゝ多し上ゝも云る如口を噤ゝてあゝむ者ハいふまゞもなゝまゞども若志はゝゝん者ハかゝるをうよた人の心ゝ　おくまざんやうに假令日本ハ弱くゝも強しといんゝて本意なるべゝ

況ていもんや外國ハ弱く日本ハ強きこと古今其跡挙て筭へ難し其ぞ中ニも弘安四年といふ年ニかの漢土を悉皆伐從へく奪ひ取ハ蒙古の忽必烈といへる王十餘萬の軍兵を渡しおこせく攻こゝ四國九國の武士どもニ度々戦ひ負終ハ神風の為ニ船を覆されて絶ニ三人生て本國へ帰りのこゝ此事を太田道灌の書ものしるいふ徒然草といふものニ評して唐人と蒙古人との強弱ハ唐人の弱きこと論を俟ず日本人と蒙古人とを比ぶるニ神風の為ニ船を破らるゝ後も猶

三萬餘人鷹嶋ニ在ゝを日本人押寄て戦ひ〳〵ハ悉く生擒まぬいくぞゝ戦ひ疲まゝとも我國の人ハ三萬餘人悉皆生擒る事ハいるべゝ是少こと蒙古人の弱きを知ぞゝとやうにいふ実ニ然る事あり此事を元史ニ徵さるに曰八月一日風破舟五日文虎等諸將各自擇堅好船乘之棄士卒十餘萬于山下衆議推張百户者爲主師號之曰張惣管聽其約束方伐木作舟欲還七日日本人来戦盡死餘二十三萬爲其虜去云〻見えるまバ神風を免まるハ悉く捕へらまく誅さまゝなるべし此

より前文永十一年十月に蒙古高麗の軍を併せて一萬五千ばかり對馬壹伎の嶋々へ襲ひ来たるに對馬に於て各國府の地頭宗右馬允助國一族郎等八十餘騎をもく馳合せて散々に戦ひ壹伎にハ守護代平内左衛門尉經高百餘騎にて出迎へ戦ひて共に潔く討死せり其後小九國の軍士大勢押渡りて蒙古の軍を駈散せるに同月の廿一日神風大に吹起りて賊船多く巌石に碎るまで辛うじて高麗に逃帰まり是を以ても想ふべし纔に八十騎百騎の小勢にて一萬五千の大軍に向ひて氣を呑まで戦ひて死にしなん我

大御國の武士は甚だ猛き事も其神風も弘安の度は如何なりしや文永の時にもあやまちげりし事をさまでハ今ハ萬に一にも然る事にはあらじ國家の命を蒙りて數萬の兵士手痛き戦を遂て討伐め追攘ん事ハいとやすく及ぶ我　神國の御稜威違ふことなく文永弘安の如き神風も必頻に吹起りて賊を平げ給ふ事毫も疑ふ所なし事を切に思ひ憑み奉りてあるべきこと我一下が下りて論ふべきを喧囂しく街巷に唱ふる

を聞くふ其謂ふ所種々ふ分まるゝ或ハ云異國といふ
中ふも今世ハイギリス威勢を得て數百艘の軍艦をもて
天下ふ縱横し國々を攻伐つゝと夥しく其向ふ所破ら
ぞといふ事なし其舟の廣大なる事海ふ浮びく山の如
く是を海城といふ又其舩の堅きこと海底の巖をも衆
崩もくだきぞいうなる大砲も打拔く事あるべし又
其舩ふ近づく時ハ巖壁ふ向ふが如くなりまバ翅なくてハ
登り難し此ふ乘る異人ども帆綱をあやつる事巧ふし
て追風ふも逆風ふも疾走るゝ意のまゝなりそれふ

加ふるに蒸氣舩といふ火舩をもて自由ふなる人の
目を驚ゝ大洋を陸よりも便利と心得る異人ども
炮術ふ鍛煉したる事ハ是亦目を驚ろかだるふく大
炮小炮一艘ごとふ數限なく携へられて此舩どもの向
ふ所防ぎ戰ふ能ハ術あるこなし支ハ漢土も戰ひ
負て彼が屬國となりぬ今ハ日本を攻んとて先一二
艘での舩どもを物ふ托へて此處彼處の湊々ふ來ら
むるなり僅ふ一二艘の舩ハ來るるに所の騷動大な
るゝざるを數を盡して寄來る事もいかゞとやあらん

かくやあるんなど人の恐懼るゝやうなる事を悍る所もなくいひてやはは皆かの蘭学者流の癖ふて已ぶ西洋の事ふ委曲きを誇り且彼方を主張して人を嚇そひぶ心得あるを奇を好むハ世人の習なるまゝ聞續ぎ語續ぎて何の辨へもなくいと囂々しく唱ふゑう寛仁大度の　國家の御目よりハ童兒の戯れ如く御覧じて聞食流させふべう免まど若正ふ事あゝん時の為を思へぞ人ふ臆を招く事もあゝんうと密ふ眉を顰むるどちらぶも有なるぶゝ其ふ就て或ハ又云船と砲とハ

彼ぶ得ゝる所ゆく御國人の得ざる所なり其得ざる所をゆく彼ぶ得ゝる所ふ向ふハ譬へば已ぶ師ゝる人と藝を爭ふぶ如くゆくいふゝても及び難き理の見ゆるより疊の上ふ舌戰ゆと敢なく蘭学者どゆる勝こゝ法得ぞおづうう和魂を損ふ端となる事あれバ船と炮とハ姑く止て日本流のひゝ責ふ攻あば海城といふも何わどの事うゆるぶき彼ハ粧飾ゆく嚇さて流あまバ日本流とハ甚異なり親打るれども乗超えゝ子打るまども乗超えといふぶ如き手痛き戰ハ日本の外よハ曾てある

ひもなく是ぞ則日本の勇武は海内に溢れてる處なれバ然らん時には氣を呑まれて彼が粧飾の大炮も何も打得ざらん事必然なり約莫合戰ハ氣を以て第一とする事にて強に器械は長短にハ因ずて況て大炮などを頼みて勝負を決すべきものにあらじ筒口を揃へたる大炮の中へと轡を並べて馳入ん事元亀天正の比は軍立は如くあらんにハ大炮など頼む軍ハ更に放つにも至らじしてひたと崩に崩るべきこと鏡に照して見るが如し又嚴しく構へたる城中へも蟻附して乗入る勢を以せバ鐵壁の如き大船なりとも乗取ん事何の難き事かハあらんかれ弘安の古も河野六郎通有といふ人ハ帆墻を橋として蒙古が船に乗移り大友散位藏人といふ人ハ纔に三十騎を率て敵船に乗入共に大いに功名して首数多捕て回りぬされバ昔より嘉明朝臣の唐島は船軍の如き戰ぞ我　御國風の軍なれバ彼にいかぞりの大炮巨艦有りとても畏るゝにハ足ずて君の為祖の為に必死の勇力を盡さん我　御國の武士に對してハ西洋諸蛮の賊どもゝかの唐島にて韓人らが刺さる鎗をぶに放ち得ずして

打負さわらん事の如くなるべしはるばる異國よりわ數多の軍艦を押向て　御國のいぶ御大事とあらん時ハ柔弱き婦女も出火といへバ覺えず膂力の出るが如く常ハ隠まてる勇武も顯はまたのづから日本流ハ手痛ク戰と成て終ハ打平げん事ハ中々ハ安くるとゝまゝ今ハ如く一二艘づの船どもハ打ふさく来るハつゆくハ下どもかゝ彼此ハ事よりわ小迫合の起るまゝ紀ハ扨ハもいかゝ然らん時の為を思へバ船と炮との主客ハ論めて衆人の和魂を損ふ蘭学者ハ流言こゝて大ゝく　御國の

弱きともなるゝまゝバいかゝ此和魂を鎮むる為ハ國家ハ本来種々の御備ども嚴かゝれバ船と炮との外ハ如此有御備もありといふ事を衆人ハ見せも聞せもするよりもがれかゝどもいひ或ハ又云遠く漢土の昔を考ふるハ元の至元といへる年の間より明の嘉靖といへる年の末まゝ倭寇と唱へく甚ゝく驚き懼き殆國中の騒動なりし事漢土朝鮮の書どもハ大概年々記ざるハもかく明の中比ハ至てハ殊ハ甚ゝく此災害ハ罹て國民の死亡國用ハ費も夥しかりしハ其防くゝ紀術

をもさはぐゝふ議論しる狀実ふ驚そしる事あらふ
我　御國の書ふハ曾てかゝる事の所見さる事あられバ
たゞ四國九國の浦々嶋々ハ暴人どもの世ハ亂ふ為術
なくして彼處へ渡ア行く盜賊をせしなどハ事あり上ふ
彼處の暴人どもハ其を據りて却て案内し導きて同
じやうふ盜賊をせしなるべしといふ事の善悪ハ姑
く置く是ふくも日本人の武く雄々しきこゝハ知まる
アさばき治平の世ニ不意出来し事あり上ふ彼處ふ
て甚く驚き恐まるん理なるニハ非るべしさて是

ふ依て考ふまバ近来参来る異國船ども何まも其國の
王命なりとまうしよりふまゝど疑無しともいひ難る
べし若かの漢土ハ倭寇ふ等しき賊船などあらバ来る
毎ふ誘き寄て鏖となし其船を焼棄るバ屢續く船も無
るべく立地ふ根を断く國の愁を拂ひ清むべし日本の
強きこゝハ海内ニ溢まるべ上ふ日本海の荒き事も
他海の類ふあらざバ輙く攻難き事ハ彼ふ能知る
處なり縱令彼王國力を盡して漸ふ攻得るとも彼ふ
損多くして益ける事ふ素より損益をのゝ主とする

戦なるふさる不便の軍を思ひ發せべなるべしバ海賊の疑あれ非ざるハ西洋の書に載る所に因て彼国風を考ふるに大ゝ其國用に常に乏しき故に諸国に渡り行く交易をなし其中に弱しと見る国うまバ押領する事あど有ゝハ聞ゆまど原来其産物貨財を得んとするまでの事なれバ損益を以て根柢とすることハいかも更あり此まバ去り遠き境に軍せんと て先國用を費して押来らんなどの事ハ大ゝ有まじく覚ゆまバ あり さて又其戦争の事あど記しゝるゆて

各國の人數を考るに國力を盡しゝんと聞ゆる時も僅に二三十萬に上るに出ず我全國の軍勢に比べ見まバいとも〳〵寡く敢あれ事どもなるまバ假令王命あれど とく恐るゝ あと足ざれどと防禦の術にかゝり有べし 左にも右にも今の如くあく年を經らず倭寇に悩らし漢土のごとく大じに國の費ゆく何よりも忌々しゝ御大事あるべしかゝるまぢハ葉を分ても考へまりしゝ事なりあぐも云ゝ上にもいへる如くおのけなれ御事どもを下ぶ下とゝて云云よ論へる罪ゝて免まバ難くれどと

是等ハ神儒佛の道々ふ心をよする輩あゞの　國恩を
思ひ我を忘まてかの蘭学者流ふ爭へる説どもなまバ
津々浦々の防禦人あゞれ心得の端となゝん事もある
べく且和魂を鎮むるまゝずゐぶんよゐ事と聞ゆれど
猶世ふ弘く云せまゐくこゝておぼゆまゝ
一今世西洋船来の書とて人々爭ひく持栄ゝかの國風ふ
魂を奪ゝ書ゝ類ハあゝで此書ハ蘭人ケンプルゞ
口よりゝ正ゝく我　大日本の國風を天下ふ比類なゝ善
き國風なりと讃称へ又御國人の強きゝゝを見も天下

ふ比類なゝ怖き称へゝる書なり外國人の眼よりを
さぞりふ見ゆる　御國ふ生まて却て彼ゞ虚飾の威
ふ惑さゝて恐ゝハ愚昧ゝ遺憾き限なゝゞゝ予按ふ
蘭学頻ふ行ゝ〻ふ就ては其学せざる者まで西洋風
深く心ふ染着く何事も彼を勝まりと思ひ真似ゝ羨む
今世の俗習なまバさる輩の耳ゝハいろゝに論解て
も容易く所念を飜まゝ〻ハあゝで況て皇國學する
輩なゞのゝ事ハ不負魂ぞと心得くなりゝふ傍痛
き事ふさゝ思ひ言ふゝ然るに是ハ蘭人のいへること

なまじひ疑ふ者なく此上もあれ證據みゝく御國の勝
きて強く尊く萬の國ふ秀ゝる事を今の人ふ悟らゝむ
るゝは此證據ふ及ものなれバ此度世ふ廣くなゝる
なり是を見是を味ひく國恩は有難く厚き事を辨へ
知り和魂の鎮ともなる由あゝバ大じあれ幸といふべし
さて此書ハ蘭人ケンプルが記るべシケレイヒンギハンヤツパン
日本志といふ書の中より抄出して長崎の譯語家志筑
意ふゝゝゝ
忠雄ぢ飜譯ゝゝるなり當時書中の意を採て假ふ鎖國
論と題號せゝハ全く忠雄ぢ意なるよゝ譯例ハ凡

を作者の意ふもゝゝざる故ふ今又更めく異人恐怖傳
と號けつ異人といひ傳といふ漢字のうへふ付て決
めて論誤ぐ人有めど別ふ思ふ旨もある上ふ俗人ふ通
ゝ易ゝゝゝめんとて聊も熟字の法ふハ拘らず唯寫本
ゆく數多の年を歴ゝる故ふ誤字脱字いとく多く讀解
難ゝ所ふぐも有ゝゝる眼の及ぶ限ハ改め且譯者假字互
ふ乎波の格を知ずして猥雜ゝゝをバ聊補ひ正ゝ
ア寫本少て見知ゝゝん人怪ゝむべゝゝ

嘉永三年庚戌三月